



北村三兄弟物語

〜 夢と理想を追い求め

北村の大地を切り開いた三兄弟の物語

北村三兄弟物語

夢と理想を追い求め

北村の大地を切り開いた三兄弟の物語



はじめに

「北村」という地名の由来を知っていますか？ 北海道にはアイヌ語を語源にもつ地名がさまざまありますが、「北村」はアイヌ語が由来ではありません。ある人物の名から「北村」と名づけられたのです。自分の名前が村の名前になるほどの偉大な人物。それが、これからご紹介する「北村雄治」です。そして、北村の開拓と発展には、北村雄治と、二人の弟、「北村颯」と「北村謹」の三兄弟が大きな役割を果たしました。北村三兄弟について学ぶことは、北村のことを深く知るだけでなく、みなさんのこれからの人生と日々の生活にきつと役立つことと思います。

目次

北村雄治

北村雄治の生い立ち

父の死と家業

大きな決心

新たな困難

北海道開拓へ

北村農場の始まり

大洪水

北村誕生

雄治の死

北村 鼈

北村鼈の信念

牧夫の経験とメリヤスの肌着

雄治の死を乗りこえて

1

2

5

7

8

10

13

14

15

17

19

22

羊毛と羊の飼育

ホームспан

ジンギスカンの普及の始まり

農地の解放へ

黽の人柄

晩年

北村

謹

謹の子ども時代

牧場主へ

ホルスタイン

石川啄木の歌碑

北村牧場の平和な日々

北村地域の発展

謹をたたえて

おわりに

23

28

31

33

35

38

40

42

44

48

50

52

56

58

北村雄治

一八七一年（明治四）年—一九〇三年（明治三十六）年

北村雄治の生い立ち

今から百五十年以上も前のことです。

北村雄治は、一八七一年（明治四）年、山

梨県鏡中条村（今の南アルプス市）に生

まれました。雄治の家は、大きな土地を

持つ、裕福な造酒屋（蔵でお酒をつくつ

て売る職業）を営んでおり、長男として

雄治が生まれた時は、家の仕事をついでくれる子が生まれたと、家族も親戚もとても喜びました。



北村雄治

鏡中条村は、自然が豊かなところですよ。すんだ川には魚が泳ぎ、季節ごとにかわる色とりどりの花が美しく、木々の鳥のさえずりがたえません。連なる山々の

向こうには、日本一大きな山、富士山の姿もはつきりと見えます。このような自然に囲まれ、雄治は、心豊かにすくすくと育っていきました。

家族に大切にされながら、何不自由ない生活を送っていた雄治は、向上心がとても強く、多くの知識を身につけたいと常に考えていました。小学校を卒業したあとは、親元をはなれ東京の中学校に進み、勉学にはげみました。学校以外でも、学者で政治家の芳野世経の私塾（個人がひらく学習の場）で「漢学」という、中国から伝わる学問を学びました。芳野世経は、何事にも努力をする雄治の人柄を次第に信頼するようになりました。責任感の強い雄治は、友人たちからもしたわれることが多く、塾の中心的な人物となっていきました。仲間たちと勉学にはげむおだやかな毎日。誰の目にも、雄治の未来にはさまざまな可能性が広がっているように見えました。

父の死と家業

しかし、そのような日々は長くは続きませんでした。父の茂兵衛がコレラという病にかかり、わずか二日後に四十七歳の若さで突然亡くなってしまうのです。大好きだった父親の死。雄治にとってはあまりに急なことで、自分に何が起きているの

※芳野世経

(一八五〇)

一九二七

父の私塾を引きついで、「漢学」を教える。明治二三年、衆議院議員になった。

かわからないほど、動揺どうようしました。尊敬そんけいしていた父が亡なくなったという悲しさに打ちひしがれ、しばらくは何も手につかない状態じょうたいが続きました。

その後、雄治ゆうじの叔父おじが父に代わって家業の酒づくりをついだのですが、叔父おじが不正を犯おかし、家のお金を使いこんでしまうという事件じけんが起きました。その結果、長男である雄治ゆうじが、いきなり家の仕事を引きつぐことになってしまったのです。雄治ゆうじ、十五歳さい。父の死の悲しみもまだ癒いえない中での人生を変える大きな出来事でした。

雄治ゆうじは、家の仕事をつぐために中学校を途中とちゅうでやめて、故郷ふるさとの山梨にもどりました。酒づくりのことは、家の仕事ではあったものの、これまで全く学まんだことがありません。中学生という年ごろで、飲んだこともない酒づくりの仕事を任まかされた時は、どんなに不安だったことでしよう。

けれども雄治ゆうじは、この困難こんなんにくじけることはありませんでした。それどころか、「自分が父なき家を守っていかなくてはならない」という想おもいを強くしたのです。まず、弟たちには教育が必要だと思い、自分が通っていた東京の塾じゅくから家庭教師を招まねき、弟たちに学まばせました。さらに、もともと勉学に熱心な雄治ゆうじは、人の学まびたいと思う気持ちりかいを理解りかいできるので、弟だけの教育にはとどまりませんでした。自宅近くの空き家じゅくに塾じゅくをひらき、遠くからの生徒も受け入れていきました。

そして、仕事である酒づくりについても、心をこめて打ちこみました。

「自分がやるからには、先祖代々伝わってきたお酒をつくるだけでなく、もつと良
いお酒をつくらう」と決心したのです。さらに雄治はこう考えました。

「やがて山梨まで鉄道がしかれ、輸入されたお酒がたくさん入ってくる。外国のお酒
に対抗できるようなおいしいお酒をつくらなければ、地方の小さな造酒屋はやってい
けないだろう。」

これまでのやり方では、そのうちにだめになってしまいうだろうと、先のことを見通
して雄治は毎日考え続けました。

そこで雄治は、酒づくりの本場である兵庫県の灘というまちに行つて、研究をする
ことにしました。灘では一から始めた酒づくりですが、雄治の熱心な研究によつて、
めざましい成果をとげていきました。ある時、この研究成果を発表する機会がありま
した。雄治の研究発表は実に堂々たるものでした。研究期間の短さを感じさせない内
容で、発表を聞いていた、酒づくりにくわしい専門家たちはとてもおどろきました。

自分の研究に自信をもった雄治は、原料になる米や酒づくりの道具を改良し、職人
をやといました。酒づくりで有名な土地の名を聞いてはそこを訪れ、真剣に勉強する
ので、協力や助言をしてくれる人もどんどん増えていきました。こうして雄治が目指
したおいしい酒づくりは順調に進んでいったのです。雄治は、大いに将来への希望を

もって熱心に仕事に取り組んでいきました。

そんな雄治に、苦難がおそいます。十九歳の時のことです。仕事場である醸造所(酒づくりの作業所)で火事が起きたのです。この火事で、酒づくりにとても大切な酒蔵の屋根が焼かれてしまいました。周囲の力も借りて、何とか修復しましたが、その翌年、二度目の火事が起こってしまったのです。今度は、建物や道具が焼かれ、大損害となる大きな火事でした。希望をもって仕事に取り組んでいた矢先のできごとに、さすがの雄治も大きなショックを受けました。「この、とても厳しい試練は一体何を自分に伝えていいるのだろうか?」「この経験を通して、自分は何を学び、何をなすべきなのか?」

雄治は毎日なやみ考えました。

大きな決心

ある時、雄治はひらめき、こう思い立ちました。

「この世の財産はういていいる雲のようで、いつ消えるかもわからない。そのような財産を残すことに一生懸命になるよりも、せつかくこの世に命をいただいたのだから、

生きがいのある人生を送り、世の中や国のためになる事を行わなくてはならない。ここで、家業をどうするか考えて、何かを見出すため、大きな決心をしなくてはならない。」

雄治は、火事という不運を乗りこえ、それをバネにしてもっと前に進もうとしたのです。そこで、子どもころから信頼していた芳野世経に相談しました。芳野世経は、雄治の話聞き、雄治らしい意気ごみとその考えに賛成してくれました。そして、紹介してくれたのは、その時の東京府知事だった富田鉄之助でした。富田鉄之助は雄治にこう話しました。

「今、我が国では北の大地の開発を急いでやらなくてはいけない。北の国では、人とお金を待ちわびている。ちようと北垣国道が新たに北海道庁長官に任せられ、すぐに赴任するはずだ。彼を紹介するので、開拓にふさわしい土地を得て北海道開拓の大事業を行うのが何よりだ。」

「北海道開拓」――北海道という土地について、雄治は今まで考えたこともありませんでした。まして、その見知らぬ土地を「開拓」するということです。思わぬ展開にお

※富田鉄之助

(一八三五)

幕末の仙台藩の武士、明治時代の官僚、実業家。慶應義塾に学び、アメリカ留学を経験。日銀総裁などを歴任。

※北垣国道

(一八三六)

幕末の鳥取藩の武士、明治時代の官僚。北海道庁長官として、鉄道などの整備や稲作を推進。

どろきました。雄治の心はわき立ちました。そして、世の中や国のため、とても大事な仕事だと感じました。迷うことなく、すぐに雄治は夢と希望に燃え、北海道へ向かう決心をしたのです。雄治、二十歳の春のことでした。

新たな困難

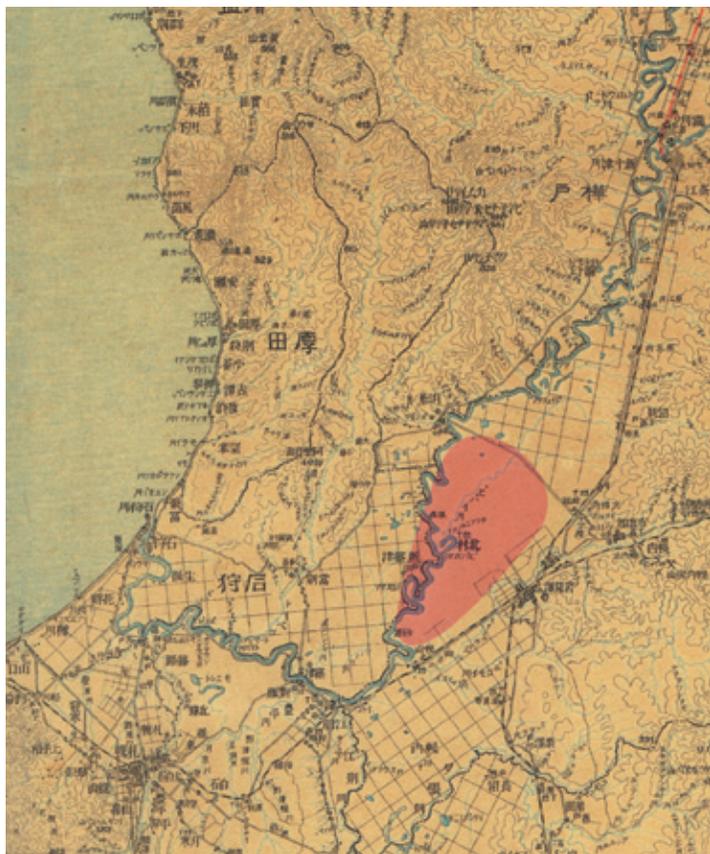
どんなことにも困難はともなうことがあるものですが、雄治の北海道開拓における最初で最大の困難は、親戚の猛反対でした。

「先祖代々、大切に引きついできた家を長男があげるの、先祖に対するこの上ない不幸だ。絶対に許されることではない」「父祖の遺産を失うつもりか」と、雄治は親戚からの攻撃と非難の嵐にさらされました。中には、「雄治は気がくるつたのだ」と言いふらす親戚もいたほどです。雄治にだけでなく、よその家から北村家に嫁いで来た雄治の母への非難はことさらに大きなものでした。雄治も母もどんなにくやしかったことでしょう。しかし、雄治をよく理解して深く信頼していた母は、一言も言い返さずに、じっと耐えぬきました。そして、雄治の勇敢な決心を鈍らせてはいけません、家族親戚のうち誰よりも先に、自分も北海道にわたる決意をし、雄治の準備を手伝い始めたのでした。

いくら周囲しゅういの反対を受けても、雄治ゆうじの決心まったは全く変わりませんでした。しかし、先せん祖そから伝わる家業からはなれてまで取り組むからには、失敗は許ゆるされません。「まず自分は北海道のどこで、どんなことを成すべきなのだろう。」酒づくりの仕事は十六歳さいだった弟の甞びんに任まかせて、雄治ゆうじは、まず北海道の調査ちようさと研究を始はじめました。

北海道開拓かいたくへ

一八九二（明治二十五）年、雄治ゆうじは北海道庁長官ほっかいどうちようちようかんとなった北垣国道きたがきくにみちにしたがって北海道にわたり、半年をかけて、さまざまなところを調べました。また、その翌年よくとしには三



明治29年の「北海道地形図」

北村には開墾予定地を示す殖民区画の線が入っていません。この空白が物語るのは、泥炭地ゆえ、耕作に適さないとみなされていたことです。人々は、そんな土地を、不屈の闘志で実り豊かな農地に変えました。

回にわたって北海道へ行き、各地を回って開拓の拠点をさがしました。そうやってついに、雄治が移住先に決めたのが、岩見沢村狐森（現在の北村）でした。うつそうとした木々におおわれているものの、豊かな土地であることは調査でわかっていたので、北海道庁長官から強く信頼されていた雄治は、開拓のための広い土地を貸してもらえることになりました。

雄治は、山梨にもどり、なぜ北海道の開拓が必要なのか、長い期間の調査結果をもとに論文を書いて発表しました。『※北海道移住者の参考に供すべき見聞私言』というこの大論文に、雄治はこう記しました。

「北海道は水産に富んでいるが、土地も豊かであることは、自分たちの想像にもおよばない事実だ。北海道開拓で大切なのは、この豊かな土地を耕し農業をおこすことである。」

雄治は北海道の土地を耕して農業を盛んにすることが、まずは自分の成すべきことと考えました。父の急死によってやむなく中学校を中退せざるを得なかった雄治が、自分で調査研究し、先見の明をもって行きついた結論でした。さまざまな困難を乗り

※「北海道移住者の参考に供すべき見聞私言」一八九三（明治二六）年、山梨日日新聞にけいさいされた論文。

切って、北の大地に描いた夢。その一步をふみ出したのです。

また、論文の中で、山梨県から北海道に移住する人を募集しました。

「国というものは、土地と人から成り立つ。山梨は、せまい土地の中に多くの人が住んでいる。一方、北海道は広い土地はあるが、人が足りない。北海道に移住し開拓すれば、国を豊かにし多くの人を養うことができる。」
と、地元の人たちに呼びかけたのです。

雄治の心意気に賛同した約百三十人が移住を希望し、その後も山梨や富山から約三百人の移住民が続きました。そして二年後に、ようやく母もやってきて、北村の開拓は本格化していきました。

北村農場の始まり

第一次の移住民を連れて開墾地についた雄治たちは、まず土地の割りふりを行い、ほかの移住民との境界をつくってから小屋を建てました。これが北村農場の始まりでした。一八九四（明治二十七）年五月のことです。六月には井戸ができ、清水がわき出た時はみなで大喜びしました。



北村鳥瞰図

飛ぶ鳥の目から見たように、上空からななめに見下ろすように描いた図

こうして夢と希望をもって始めた開拓ですが、実際はつらいことの連続でした。その当時は道路もなく、原生林と冷たくしめつた土地が広がるばかり。住む家も満足なものではありません。寒さにたえ、飢えをしのぎ、つかれた体にむちを打って、うつそうと生い茂った大木を切りたおしていくのです。山梨という温暖な気候で過ごしていた移住民にとって、その苦労は想像をこえる過酷なものでした。その上、近くを流れる石狩川の大洪水で、せっかく育てた畑の作物が何度も流されてしまうのです。「もうここではやっていけない」と、にげ出す人があつとをたちません。雄治は、次々と起こる困難に心が折れそうになることもありました。しかし、覚悟をもって家業をやめ、たくさんの人を連れてきたのです。雄治は決してあきらめることはありませんでした。

雄治は、移住民たちが生活しやすいようにさまざまな工夫をしました。まず、移住民の心の支えとして、東

京からお坊さん呼びました。農場内にお寺をつくり、そこでお坊さんからのありがたい説教を聞けるようにしたのです。そして、教育に熱心だった雄治は、そのお寺を使って、読み書きや計算を教える寺子屋を始めました。それが北村小学校の始まりです。

また、月形の樺戸監獄※からの脱走犯だつそうはんに対する不安を解消するために警察を置きました。開拓中の北海道では、乱暴なふるまいをする人も多く、開拓民を苦しめていたので、故郷をはなれ、はるか遠い北の地にわたって来た移住民にとって警察はなくてはならないものでした。

農場の経営が苦しくなると、雄治は資金集めにもかけ回りました。山梨の山林を売ったり、東京で銀行からお金を借りたり、さまざまなネットワークを活用して移住民の生活を支えるために努力しました。お金の面で力を発揮しなくてはならなくなったため、東京と北海道を行き来することが多くなっていきました。今のように交通が発達している時代ではないので、東京までの行き来には時間も体力も相当必要でした。その無理がたたったのか、雄治は病気になるってしまいます。病院で調べてみると、結核けっかくでした。結核という病気は、当時は死亡する割合が高い病気で、薬もなかったため、栄養のあるものを食べて安静にし、体力をつけることしか治療はありませんでした。雄治は、やむなく北村を離れて療養することになりました。残してきた移住民のこと

※寺子屋
子どもたちに読み書きなどを教えた場所。江戸時代に始まり、主にお寺で行われることが多かった。

※樺戸監獄
国内の各地で反乱を起こした重罪人などを収容するため、一八八一（明治一四）年に設置された施設。

が心配でなりませんでしたが、弟たちの力を借りて、とにかく安静あんせいにすることにしました。

大洪水だいこうずい

そんな折おり、一八九八（明治三十一）年の秋に、大洪水だいこうずいが起きます。『石狩原野大洪水』と呼ばれる大きな洪水こうずいで、せっかく開拓かいたくした土地はほぼ破壊はかいされました。農場一面が泥どろの海となり、畑作物は全滅ぜんめつ。家が流され、死者が出るほどの災害さいがいでした。

移住いじゆうしてまだ数年しかたつておらず、やっと生活が安定してきた農民たちにとって、この洪水こうずいは大きな打撃だげきでした。北海道庁ほっかいどうちやうと政府せいふは、水にがす排水路はいすいろや道路をつくる工事を行い、災害さいがいにあつた住民を助けるため手をつくしました。狐森きつねもりのあたりも大きな被害ひがいを受けましたが、岩見沢村（当時は村）の役場は少し遠いため、すぐには対応たいおうしてもらえません。住民たちの中に次第しだいに不満がつり、岩見沢村からの独立どくりつを望むようになりました。

「こうなつたら自分たちの村をつくろう。」

雄治ゆうじの義理ぎりの弟、※北村都八きたむらとほちが中心となつて独立どくりつをお願いする文書をつくり、北海道庁ほっかいどうちやうに出したのです。これは雄治ゆうじの意志いしを受けついで移住いじゆう民たちの、なみなみならぬ

※北村都八きたむらとほちは雄治ゆうじの義理ぎりの弟で北村農場の初代代理人。雄治ゆうじが北村農場を開いてから十五年間、都八が書き綴つづっていた『北村農場日誌』は当時の北村の様子を知る大切な資料となっている。

意欲と自信の表れでした。

北村誕生

こうして、一九〇〇（明治三十三年）、狐森のあたり一帯は岩見沢村から独立することにになりました。道庁は村名を決めるにあたって、村全体を調査しました。すると、雄治が中心となつてつくつた農場のあたりに農家が多く、人が集まっていることは明らかでした。かつての北海道庁長官、北垣国道と親しく、東京では経済界や政界にもネットワークがある雄治の存在はもともと有名でした。調査を進めると、その地域が「生きがいのある人生を送り、有意義な事業をなして世を益し、国に奉公したい」という雄治の勇気と心意気から始まり、たゆまぬ努力によつて切りひらかれた土地であるということが、道庁の役人たちにもわかつてきました。村の名前を考えるにあつて雄治の存在がとても重要だと思つたのも当然のことでした。

そうしていよいよ村の名前が決まりました。北海道庁の告示には「北村と称す」とありました。由来はもちろん北村雄治なのですが、それだけではなく、遠くの地から移住した人たちが、慣れない気候や度重なる水害にもめげずに苦勞して開拓を続けた「北の村」であることもあわせて、「北」村と名づけられたのです。いよいよ北村の

誕生たんじょうです。

雄治ゆうじは、まさか自分の名前が村の名になるとは考えてはいませんが、自分が移住民いじゆうみんたちとやってきたことが認めみとられたという証あかしとして、この上ない喜びよろこを感じました。

独立どくりつしたその年は、北海道開拓かいたくを志こころざした雄治ゆうじが狐森きつねもりに北村農場をひらき、さまざまな困難こんなんとたたかうこと八年、借りた土地全部を開拓かいたくし終わり、北村農場が名実めいじつともに成立した記念の年でもありました。

ちなみに、雄治ゆうじの名前から名づけたのであれば「北村」村だと思っておりますが、それだと語呂ごろが悪いため、「北」村にしたと言われているようです。

雄治ゆうじの死

北村きたむらが独立どくりつしたあとも、雄治ゆうじのいそがしさに変わりはありませんでした。水害みづがいや冷害れいがいですぐに足りなくなるお金を集めるために、いろいろな人をお願いし、かけずり回る毎日。ゆつくりと体を休ませるひまもないまま、雄治ゆうじの病気はどんどん悪化していききました。それでも雄治ゆうじは病気とたたかいながらも北村のために働きましたが、どうとう、一九〇三（明治三十六）年、療養りょうようのために訪おとずれていた神奈川県鎌倉市かまくらしでこの世

を去りました。妻や弟たち、村の開拓や移住民たちの生活など、さまざまなこと以後ろ髪を引かれながら、わずか三十二年の人生を終えました。

短い一生でした。しかし確かに、雄治が決心した通り、「生きがいのある人生を送り、世の中や国のためになる事を行った」人生でした。あまりに早すぎる死に、多くの人々が悲しみました。当時の新聞は、雄治が亡くなったことを大きく取り上げ、その功績を称賛しました。

雄治という名に恥じない雄大な心を持ち、世の中のために努力を続けた雄治。十五歳で父をなくしてから周囲の反対を押し切り北海道開拓に乗り出して、わずか十年あまりの間に、日本中の人々が誇りに思う事業を成しとげたのでした。

雄治は、開拓を行うと決めた時にこのような言葉を残しています。

「美しい玉である北海道は、これまで単なる石として見捨てられてきたが、玉はどうあっても玉であって、私はその価値を見出した。北海道は日本における宝の宝庫であると断言する。今こそ多くの人がこの北海道をすぐれた玉であることを認め、美しい光をかがやかす時である。」

雄治は、それまで多くの人気がなかった北海道の価値を見出しました。そして

自らの手で北村の地を開拓し、豊かな大地として花開かせたのです。雄治の努力なくして、今の北村、いえ、北海道の姿はあり得なかつたことでしよう。

北村 龍

一八七六(明治九)年—一九六〇(昭和三十五年)年

北村龍の信念

北村雄治には、八人の兄弟がいました。雄治の五歳下の弟が、一八七六(明治九)年に生まれた北村龍です。龍もまた、北村の開拓には欠かせない人物です。



北村 龍

父の茂兵衛が急死したとき、甞はまだ十一歳でした。兄の雄治が東京から山梨にもどり、家業である酒づくりを開始すると、甞もまた小学校の高等科を中退して、雄治がひらいた塾で学びながら家の仕事を手伝っていました。その後、雄治が北海道へ開拓に出向くことになり、家業を任されたのが十六歳の時。鏡中条村で、雄治に代わって家の仕事と留守を守っていました。

甞は子どもころからとても勉強熱心でした。読書家でたくさんの本を読み、二宮尊徳や西郷南州、スマイルズなどを尊敬していたといえます。塾で学んだ漢学や、西洋の思想からいきょうを受け、それが甞の考え方のものになっていきました。

酒づくりの仕事しながら、甞は、北海道で開拓を進めている雄治のことばかり考えていました。「どうして兄は家業をやめてまで北の大地に向かい、つらい目にあいながらも農場をひらいたのだろうか？」

読書や勉強から得たさまざまな知識をもとに世の中のことや兄のことを考えるうちに、甞は一つの考えにたどり着きました。それは、「農業」についての考え方でした。甞はこのような言葉を残しています。

「農民は国を支える大事な基礎であり、国の底力となる。農業は人類の繁栄のためであり、営利を目的としてはならない。真の農民の使命は天に代わって人命を支えることだ。」

※二宮尊徳

(一七八七)

一八五〇

江戸時代後期の農政家、思想家。「報徳(徳をもつて徳に報いる)」が大事であると唱えた。

※西郷南州

(一八二八)

一八七七

幕末の薩摩藩の武士、明治時代の政治家。「敬天愛人(天を敬い人を愛す)」という言葉が有名。甞はこの言葉が書かれた額を部屋にかかっていた。

※スマイルズ

(一八一二)

一九〇四

イギリスの作家、医者。「天は自ら助くる者を助く(人にたよらず自分自身で努力する者には、天が助け、幸福をもたらす)」という言葉が有名。

農業は、国や人を支える根本的でかけがえのないものなのだ。だからこそ、雄治は世のため人のために有意義なことを成しとげようと北海道開拓を行い、農業を始めたのだと、甞は理解したのです。

北海道にいる兄を訪ねた甞の目に、世の中のために奔走する雄治の姿が焼きついてはなれませんでした。「北海道の開拓を志した兄のように何か世の中のためになることを目指して努力したい」という気持ちがある甞の中で大きくなっていききました。そしてとうとう、酒づくりの仕事をやめる決心をしたのです。歴史ある家業を全てやめ、自分も仕事を失ってしまう。その覚悟はどれくらいのもだったか、計り知れませんが、しかし、兄の偉大さを目のあたりにして、改めて、甞は自分の生きる道を考えたのでした。

牧夫の経験とメリヤスの肌着

甞は、もともと海外のことに興味が有り、子どもころから貿易の仕事をしてみたいという夢をもっていました。そこで、山梨や東京で酒づくりの仕事や家の後片づけを終えたあと、漢学の先生だった芳野世経からの紹介で、オーストラリアに六ヶ月間行くことにしました。

オーストラリアでは、とにかく何でもやってみようと心に決め、たくさんの種類の仕事を経験けいけんしました。飲食店とホテル以外の仕事はほとんどやってみましたが、中でも多かったのは、「牧夫ぼくふ」という羊の世話をする仕事でした。この時の経験けいけんが、のちに大いに生きることになるのですが、それはあとでお話ししましょう。

甍びんがオーストラリアから帰国したのは、一八九八（明治三十一）年十月。その少し前に北村をおそった大洪水だいこうすいについては、前にふれました。大雨により石狩川いしかりがわが荒れあるい、北村をふくむ石狩平野の約二万の家屋かちくが水につかり、死者は百十名以上。収穫しゅうかくをもうすぐむかえようとする農作物は全て泥すべの中にうまりました。この時の洪水こうすいは、現在いまに至るまでもつとも悲惨ひきんな被害ひがいをおよぼしたと言われています。北村農場の大きな被害ひがいの知らせを聞き、帰国したばかりの甍びんは急いで北村に向かいました。病気で療りょう養ようが必要だった雄治ゆうじは、甍びんが来てくれると知って、どんなに心強こころかったことでしょう。この苦難くるなんを乗り切ろうと兄弟は力を合わせて立ち向かいました。甍びんは、農民の食料やお金の確保かくほのために政府せいふに出す書類を作成し、北村の農場で水害の処理しゅりにあたりました。いつしか、雄治ゆうじや北村の人たちとの絆きずなと信頼しんぱい関係は深まっていききました。

北村での仕事が落ち着き、甍びんは東京で働くようになるのですが、北村のことが気に

なつてしかたありません。雄治の病状は思わしくなく、水害の復興にも時間がかかりそうです。自分が東京にいては、すぐに農場を助けることもできません。

「いつでも農場にかけつけられる場所にいたい。」

そう考え、黽はしばらくの間北海道に行こうと決意しました。

東京の人たちはさびしがりながらも、黽の決断を応援してくれ、東京から北海道へ出発する日には、駅に見送りに来てくれました。その時、見送りの中の一人から、イギリス製の毛糸で編まれたメリヤス（機械で糸を編んだ布）の肌着をもらいました。北海道の寒さは体にこたえるだろうという思いやりがこもった贈り物でした。この肌着の何という暖かさでしょう。これから行く北海道での生活には期待もありながらも、不安もありました。しかし、みなのお援助とメリヤスの肌着に、黽は、はげまされ勇気をもらいました。

北海道に行つてからは、この肌着をずっと愛用していました。初めて経験する厳しい寒さから、メリヤスの肌着が黽を守ってくれたのです。そのうちに黽はこう確信するようになりました。

「このメリヤスは北海道の開拓民や戦争にでかける軍隊の人にとって欠くことができないものだ。必ず役立つものになる。」

この思いつきは、やがて北村を新しい未来へと導いていくのでした。

雄治の死を乗りこえて

甞は、北村農場の中心となつて働き始めました。雄治の病状が悪化し、とうとう亡くなつてしまつたのは、その矢先のことでした。子どもころから慕い、いつもあとを追つていた兄。頼りになる家族であり、同時に目標としていた人を失つてしまつたのです。「兄にはもつと人々や国のためにやりたいことがあつただらうに。」

雄治の若すぎる死に、やりきれない気持ちがあふれました。

亡くなる直前に、甞は雄治から手紙をもらいました。手紙には、甞が自分のあとをついでくれたことや、下の弟、謹が農学校に合格したことで安心したということが書いてありました。そして、開拓は大変な仕事だから健康には気をつけて欲しいという、弟へのいたわりの言葉がありました。兄としての思いやりと優しさに満ちた手紙でした。病気で体がづらい時もなお、自分たちのことを気づかせてくれる雄治の深い愛情にふれて、涙が止まりませんでした。

しかし、いつまでも泣いているひまは甞にはありませんでした。雄治からの遺言で、北海道開拓の仕事を任されていたからです。北村農場で働く人々は自分を待っています。雄治のあとをついでやる仕事は数多くありました。水害にやられると畑作だけで

は収入が不安定になります。そのため、牛や馬、豚を飼う牧場も並行して運営していたので、北村農場は大いそがしでした。

その一方で、雄治からの意志について、社会にこうけんすることについて改めて考えていました。責任感の強い毘は、「自分がしつかりしなければ、北村の村民はどうなるのであろうか。自分は村のために何をなすべきなのか」と、常に村のことを考えるようになったのです。

そこで、農場の仕事のかたわら、北村をまとめる役職である「戸長」（今の村長）に就任し、自ら先頭に立って村の発展のために努力を重ねました。

毘は、四年間北村農場をかんたくしながら、北村の戸長として仕事をしましたが、その間にもらった給料は全て貯金していました。戸長をやめる時に、その中から北村役場の職員全員にお金をあげて、残りを北村小学校の改築の費用として寄付したといえます。つまり毘は、戸長としての四年間の給料は全て北村のために使ったのです。村の人からの毘への信頼と尊敬は深まるばかりでした。

羊毛と羊の飼育

第一次世界大戦という大きな戦争が世界で起こり、そのえいきょうで、羊毛がイギ

リスから日本に入つて来なくなりました。そう
なると、羊毛を使った衣類や毛布の値段がとて
も高くなつてしまいます。十年あまりのうち
羊毛は約五倍の値段になり、すぐには買えない
高価なものとなつてしまいました。羊毛は、寒
さとたたかう北海道の人々にとつてだけでな
く、日本全体にとつても大事な資源でした。戦
争が長引く中、寒さの中で訓練をしなくては
いけない軍隊にとつても必需品だったのです。北
村でも子どもたちは、うすつぺらな布団にくる
まり、防寒具もなく学校に通うようなありさま
でした。手足が痛くなるほどかじかんでいる、
その姿を見て甍は胸を痛めました。

「このままでは村の子どもたちがかわいそうだ。何とかしなくては。」

その時、甍は思い出しました。大洪水のあと、病気の兄にかわり北村の復興のため
東京から北海道に向かったときのことを。その時にもらつたメリヤスの肌着の暖か
さ、そして、そのおかげで自分が厳しい冬を乗りこえられてきたということ。その



北村で飼育された綿羊

ことと同時に、オーストラリアで牧夫をした時のことも思い出しました。

「北海道の暮らしのため、そして日本のためには羊毛は絶対に欠かせない、羊毛が外国から入ってこないのだったら自分たちで羊を育てればいいのだ。自分なら羊の育て方がわかる。」

そこで、羊をたくさん売ってもらえるように政府にお願いしましたが、すぐに断られました。そのずっと前に、政府は、アメリカから羊を何回か輸入したことがありましたが、いずれも失敗に終わっていたからです。

「日本の中でも飼育に成功する確実な方法がまだなく、まして飼育の経験がない北村の素人にできるはずがない」と政府は反対しました。次に北海道庁にも相談に行きましたが、それでも止められました。

ここであきらめてしまいそうになるところですが、甞はくじけませんでした。道内をくまなく探し回り、羊を各地から買い集めました。しかし羊毛にするには、まだ足りません。そこで、政府の羊を無断で育てるしかないと考え、政府が委託していた有珠郡の伊達村から強引に子羊を北村に連れて来ました。

反対を押し切って羊の飼育を強行しようとしたのは、甞に確信があったからでした。日本で羊の飼育に失敗してきたのは、外国のように広い牧草地がないことや雨の量が

多く湿度しつどが高いこと、羊の飼育経験いくけいけんがないことなどが原因と言われていました。

そこで甞なは、こう考えたのです。

「農家それぞれが飼かう羊の数を減へらして責任せきにんを持って飼育しいくすれば、日本のようにせまい土地でも多数の飼育しいくができるし、羊を犬やねこのようにかわいがり、雨の日や冬には屋内に入れて世話をすれば、湿度しつどの問題も経験けいけんがないことも解決かいけつできるのではないか。」

最初、農家の青年たちは、「自分たちに本当にできるのだろうか？」と、とまどいました。みな、羊を育てたことなどないのですから。それでも甞なが熱心に青年たちに働きかけたのには、深い理由がありました。その当時、農家の仕事は豆や米、麦の収穫かくが中心で、それだけだと収入しゅうにゅうが少なく、増ふえることがありません。また、長い間雪が降ふる冬は仕事がなくなくなり、その間の生活こまに困こまっていました。羊を育て、羊毛をかり取とって売れば、農家の収入しゅうにゅうにもつながります。水害みずがいで農作物がだめになったとしても、他の収入しゅうにゅうがあることは生きていくためにとても大切なことでした。そして、羊毛は北海道だけではなく、日本全体に必要なものです。農家の誇ほこりにもつながると甞なは考えたのです。

「北村で羊を飼育しいくすることは、必ず農家たちや、ひいては世の中のためになる。」

黽の考えはゆるぎないものでした。

北村の青年たちは、しだいに黽の考えに賛同するようになり、自分たちも羊を育てみよう、それぞれ二頭ずつを家で育て始めました。羊を育てる知識も経験もない彼らは、牛や馬などの畜産の専門家からは冷たい目で見られました。時には馬鹿にされ笑われることもあり、くやしい思いをしました。しかし黽が言うのですから、自分たちがやっていることが正しいと信じるほかはありません。彼らは、犬やねこと同じように、とても大事に羊を育てました。

するとどうでしょう。飼い主からの愛情をたくさん受けた羊の毛は、とても品質の良いものとなったのです。北村でとれる羊毛はすばらしいと、品質の良さがうわさとして広がり、全国でも評判となりました。こうして北村では、羊毛を売ることが農家の大きな副収入となり、周辺の農家にも広がっていききました。不安な気持ちもありながら飼育を始めた農家の青年たちの喜びはひとしおでした。

最初は反対した役人も、羊の飼育が成功しているということを知り、北村に視察に訪れました。北村の様子を見て役人たちはおどろきました。羊たちは何とすくすくと育っているのです。かつて羊の飼育に反対した役人たちは黽に頭を下げました。そして、「羊の飼育は国にとっても大切なので、これからも努力を続けて欲しい」と農家の功績を大いにたたえました。黽のやり方が認められ、その後は北村をモデルと

して、羊の飼育が全国で積極的に進められることになりました。

「綿羊の北村か、北村の綿羊か」（綿羊Ⅱ毛をとるための羊）と言われるほどになり、北村から羊が送り出されることもありました。こうして電が考えた通り、羊の飼育は農家の収入につながっていったのです。

ホームспан

第一次世界大戦が終わって、海外からまた羊毛がたくさん入ってくるようになりました。そうすると今度は、羊毛の値段が下がってしまい、農家の生活にもえいきょうが出始めました。羊を育てるようすすめてきた電は責任を感じてなやみました。

「羊を利用して生活を安定させる良い方法は何かないだろうか？」

すると電はまた新しいアイデアを思いつきました。それが「ホームспан」でした。「ホームспан」とは、家庭でつくった毛糸で手織りした織物のことで、イギリスで始まりました。そのころ日本では、絹や綿の織物が盛んで、外国にも輸出されていた。そのことにもヒントを得て、農家の女性たちが器用なことを知っていた電は、「自分たちもホームспанをやってみよう」と考えたのです。

思いついたらすぐに実行にうつす電のことです。さつそく、ホームспанの洋服を

つくるために準備を始めました。

まずは羊毛を使った加工品の講習会を北村で行いました。羊毛から毛糸をつむぎ、色を染めて帽子やセーターなどを編むまでの「羊毛加工講習会」は、全国でも初めての試みとなりました。甞の妻、ちかよもこの講習会に参加して技術を身につけました。その後、ちかよは、熱心に毛糸をつむぎ、洋服二枚分の量の毛糸をつくりました。甞は、この毛糸を使って、何とかしてホームスパんで洋服をつくりたいと思いましたが、その



家(home)で紡ぐ(spun)を語源とするホームスパン

ころの日本には、ホームスパン用の『はた織り機』はありません。そこで、札幌の織物業者に頼み、毛糸で洋服を編むことができる機械を特別に注文したのです。罫の取り組みに共感した織物業者は、苦心してオリジナルの織り機をつくりました。

ちかよは、その織り機を使い、本格的にホームスパンに取り組みました。なにせ初めてのことですから時間がかかります。ようやく二着分の洋服の生地をつくりあげたのは、三ヶ月後のことでした。そしてさらに三ヶ月かけて、冬服とコートを罫のために仕上げたのです。

これが、日本で初めての純国産ホームスパンの洋服でした。罫はとても喜びました。洋服の暖かさはもちろんのこと、ちかよをはじめ、北村のみんなで苦労してつくり上げたことがとてもうれしかったのです。罫はどこに行くにもホームスパンの洋服を着て出かけ、宣伝をしました。

その宣伝のおかげで、ホームスパンでつくった洋服が注目され始め、評判が少しずつ広がっていききました。その当時、綿羊の飼育から毛糸をつむ



ホームスパンのスーツ

ぎホームスパンの織物^{おりもの}まで全部を行っていると、日本には北村しかありませんでした。こうして北村は、全国から注文を受けるようになりました。そしてホームスパンの洋服は皇后陛下^{こうごうへい}もお買い上げされるほど有名になったのです。ひとえに甍^{びん}のアイデアや想いと、甍^{びん}を信じてひたすら行動を続けた北村の人たちの努力の結晶^{けっしょう}でした。

ジンギスカンの普及^{ふききゆう}の始まり

綿羊^{めんよう}の飼育^{しいく}が盛ん^{さか}になるにつれて、次に甍^{びん}をなやませたのが、良質^{りょうしつ}な毛をとることができなくなり、年老いていく羊をどのように活用したら良いかということでした。明治時代の日本では、牛肉を食べる習慣^{しゅうかん}が少しずつ広まっていました。まだ羊の肉を食べることはほとんどありませんでした。まして綿羊^{めんよう}を見たことさえない人が多いのです。そんな時代に、何とか羊を最後までむだにしたい一心で、羊肉^{ようにく}を食べるといふアイデアを甍^{びん}は思いつきました。

「羊肉^{ようにく}は栄養^{えいよう}が豊^{ゆた}か消化^{じょう}がいいので女性^{じょせい}や病気の人も食べやすいはずだ。食料^{じきりょう}にすれば羊を最後まで活用^{くわん}できる。」

そう考えた甍^{びん}は、誰^{だれ}かに会うたびに羊肉^{ようにく}を試食用^{じしじよう}として配^{くわ}るようにしました。また、

中でも力を入れたのが、家庭料理への普及でした。家庭で羊肉が食べられるようになれば、たくさんの人たちが羊肉を楽しむことができ、消費量も増えるだろうと思っただけです。そこで、当時は台所に立つことが多かった女性や、これから料理を学ぶ学生にも働きかけて、試食会を何度も行いました。羊肉には独特のにおいがあるので、専門家にも意見をもらいながら、北村農場を中心にさまざまな調理法を考え、試しました。そのレシピの中に、みりんやしょうゆで味つけをした羊肉の網焼きがありました。これが、北海道名物の味つけジンギスカンのもとだと言われています。全国の他の土地でも、羊肉を試食したところはあったかもしれませんが、これほど長期間にわたり本格的に羊肉を食べていたところはあまり例がないということなので、北村は「ジンギスカン発祥の地」と言っても良いかもしれません。

〈羊肉の網焼き〉

材 料	
羊肉	375g
醤油	約大さじ1
	小さじ1/2
みりん	約大さじ1
	小さじ1/2
塩	小さじ1
七味唐辛子	少々

つくり方

- ・羊肉を約3mmの厚さに切る
- ・みりんと醤油の中に約10分間浸し置く
- ・七味唐辛子と塩をまぶして10分間置く
- ・熱した金網で両面を焼く



農地の解放へ

兄の雄治が亡くなる前に甞に言い残した大事なことがありました。それは、「農家に開拓した土地をわたすこと」でした。というのも、その当時、土地を持っている人は、小作人をひどく働かせて農作物を生産し、そこから小作料をとることで大きな富を築いてきたのです。雄治は、それをよしとはしませんでした。甞も、このように農民を働かせ、自分たちだけが利益を得るやり方は良くないと感じていました。このやり方では、農民のやる気が失われ、結局は生産量も減っていくとわかっていたので、農家が良い農作物をたくさんつくり、生活を向上させるためには、農家それぞれが自分の土地を持つということが大事だと甞は考えました。そして昭和時代に入ってから、いよいよ農地を農民に解放するための準備に取りかかりました。

「農場の資本力と、あなたがた自身の労働力とによって、開墾は見事に成功した。今後は、それぞれの財産を増やす段階に入るのだが、小作人ではそれが不可能であるから、五年後には土地をあなたがたのものにしてあげよう。」

と、甞は宣言したのです。

農民にとって喜ばしいことかと思いきや、最初、農民たちはとまどいました。農地を手に入れることに乗り気ではなかったのです。土地を持つためには土地代というお

※小作人
土地を所有する地主から土地を借りて農業をする人。地主へは小作料という土地の使用料をはらった。

金がかかります。全部はらうことができず農民はあまりいません。まして北村には水害が多く、毎年の豊作は約束されていません。土地を得た分のお金をはらうことはできないのだからと、農民の間に不安が広がりました。

そこで、甞は、農民の負担を少しでも軽くするために、ある方法をとりました。土地代を政府が決めている価格の半分にして、残りの半分は、自分がいったん出すことにしたのです。そして、農民が無理なく甞にお金を返すことができるように金利（借金の利息）を安くしました。農民は、そこでようやく安心して喜ぶことができました。苦勞して耕してきた土地を自分のものにしていくのですから。甞のすすめで独立する農家が次々と現れ、最終的には全ての農家が土地を持ちました。これには政府の役人もおどろきました。

「空気と水と土地とは独占すべきではない。耕す農民にあたえるべきである。」

そう強く言い続けてきた甞は、この言葉どおりの農場解放を成しとげたのです。一九三二（昭和七）年春には、北村



北村神社境内にある北村甞の碑（自作農開設記念碑）

神社と北村小学校で農場解放記念の式典が行われました。そこで甞は、農家の独立に雄治がどんな想いをもっていたかについて語りました。雄治から受けついで仕事を大成させ、胸を張って青空を見上げると、遠くで雄治がほほ笑みながら見守っているような気がしてなりません。

この取り組みは、全国のお手本となっていました。今では、自分たちの土地を持つ農家がほとんどですが、雄治と甞の力がなければ、こんなに早い時期に農地が解放されることはなかったでしょう。

甞の手柄

甞はとても読書が好きで、たくさんの本を読みました。北村のように交通の不便なところこそ、読書によって知識や文化の発展を図らねばならないと考え、北村農場には図書室を設けていました。開拓の時代では、大多数の農家が生き延びることでやっとという生活を送っていたので、どんなに学ぶ気持ちがあっても、中学校や高等学校に行くお金がない人も多くいました。さらに世の中には「農家に学問はいらない」という風潮がありました。甞は小学校さえ行けなかった当時の多くの農民のために、書類の漢字にはできるだけわかりやすいふりがなをつけ、難しい言葉にはいいねいな説

明をつけて読みやすい工夫をしていました。自分にも家庭の事情から学校を中退したつらい経験があったので、村の教育について、熱心に取り組みました。特に青年男女の指導には力を入れ、青年中学校を経営し、女子への補習教室をいち早くつくりました。空知農業学校（今の岩見沢農業高校）にも、創設時からさまざまな援助を行いました。

ある年、空知農業学校で運動会が行われた際、競技中に一人の生徒が骨折し、入院することになりました。当初一ヶ月の入院の予定が長引いて、三ヶ月もの治療が必要となつてしまいました。生徒の家庭では、入院費用が足りなくなり、病院から退院をせまられてしまいます。生徒も家族もとても困り、学校の先生たちも責任を感じて頭をなやませていました。ある日、黽がたまたま学校を訪れた時に、校長先生がこの生徒について話したところ、すぐに黽はこう提案しました。

「まず医者に相談して入院費を半分にしてもいいなさい。あとの半分は自分が出そう。」校長先生は早速お医者さんに相談したところ、了解してくれました。黽が病院代を出してくれたので、生徒は安心して治療できたということです。

また、こんなこともありました。空知農業学校が十周年をむかえた時、職員や生徒

の家庭からお金を集めて、寄宿舎（生徒が共同生活する建物）をつくろうとしました。建築業者には、建物ができあがった時にお金をはらうという条件でしたが、お金を集めるのに時間がかかってしまい、学校はお金をはらうことができませぬ。困り果てた校長先生は電に相談しました。校長先生から事情を聞いた電は、「寄宿舎を建てるのは、教育上とてもすばらしいことだ。自分の土地を貸すので、それをもとにして銀行からお金を借りなさい。」

と言いました。電のおかげで学校は銀行からお金を借りることができ、無事に寄宿舎が完成しました。校長先生は電の人柄に感動し、尊敬の気持ちをいただきました。電がしてくれたことを周囲の人に伝えたかったのですが、電が自分の名前は言わなくていいと言うので、ずっとだまっていました。しかし、電が亡くなったあとに、校長先生はどうしようかと考え、やはり話すことにしたのです。地域の人たちは、電の人柄とともに、約束を守ってずっと秘密にし続けた校長先生のことを誇りに思いました。

一九三二（昭和七）年、またも北村をおそった大洪水からの復興のために、北村は大金が必要になりました。北村役場は、銀行にお金を貸してもらえようお願いに行つたところ、簡単には貸してもらえず、とても苦勞しました。しかし、最終的には、「北村電が保証するならば認めよう」と、お金を貸してくれたのです。電の信用がいかに

大きかったかがわかるエピソードです。

電びんは、食べるものを節制せつせいし、むだな時間やお金を使うことにも厳きびしい人でした。しかし全てを節約するのではなく、教育や、生活にとつて本当に必要なものにはきちんとお金を使いました。電気会社にかけてあって、他のまちよりもずっと安い電力を村全体にいきわたらせ、電灯を一気に灯ともしたのも電びんでした。

生活に対する電びんの姿勢しせいがよく表れている言葉をご紹介します。

「※命いのちあつての物種ものだね、ということがありますが、ただ生命をつないでいるだけではだめなので、いつまでも身体のうりよくと能力をフルに使い得えてこそ生きがいあるものと言えましょう。生命あんそくじよの安息所である家庭を明るくし、複雑ふくざつな生活を簡素化かんそかし、もつとも高度な文化生活を取り入れて、古い殻からからぬけ出したいものです。」

※命あつての物種
命があれば、どんなことでもできる
という意味。物種
は、物事の根本と
いうこと。

晩年ばんねん

当時、ほとんどの地主じぬしは、管理人のみを農場において、自分は農場にはいませんでした。しかし、電びんは農民とともに生活することを決め、七十八歳さいをむかえるまで北村

で過すごしました。その後、厳きびしい寒さにたえられなくなり、体も自由に動かせなくなつたのをきっかけに、故郷ふるさとの山梨にもどることにしました。一生の大部分で自分の全すべてをかけて愛情を注そそぎ続けた北村の地には、たくさんの思い出がつまっています。農民たちのゴツゴツした手、青年たちの若々わかわかしい汗あせ、メリヤスの肌着はだきを着た時の幸せそうな子どもたちのほおの色……。そして水害や冷害れいがいといった苦悩くのうを乗り越え、たあとにわかち合う安堵あんどと笑顔。それら全てが黽びんの宝物たからものでした。黽びんは、故郷ふるさとで朝あさな夕ゆうなに富士山ふじさんをながめ、遠く北村の無事ぶじを祈いのりながら、余生よせいをおだやかに送つたのです。一九六〇（昭和三十五）年、黽びんは、東京にいる長男ゆういち雄一の自宅じたくで亡なくなりました。黽びん、八十五歳さい。その偉大いだいなる功績こうせきは、今もさまざまな足あととして北村に残っています。

北村きたむら

謹きん

一八八二(明治十五)年—一九三五(昭和十)年

謹きんの子ども時代

北村には、かつて、たくさんの牛がいたのを知っていますか？ 二〇一七(平成二十九)年に、北村牧場が長い歴史に幕を閉じるまで、北村では牛の飼育がとても盛んで、全国でも有名なところでした。その基盤を築いたのが、北村謹。「空知ホルスタインの父」とまで言われた偉大な人物でした。



北村きたむら 謹きん

北村謹は、茂兵衛の六男として一八八二(明治十五)年に生まれました。雄治とは七歳ちがいで、父が亡くなった時、謹はわずか四歳。その時から雄治が父親がわりと

なって謹を育てました。裕福な家に生まれた謹は、自由でわんぱくな子どもでもでした。人のうちの柿をとって食べたり、いろいろないたずらをしたりするので、近所から苦情がくることも多く、母親はいつも周囲に謝っていました。

小学校を終えると、山梨から東京へ引っ越し、兄と同じく、漢学者の芳野世経の塾に入りながら中学校に通いました。ここで学ぶうちに、謹も芳野世経のえいきょうを強く受け、曲がったことはどんなことでも嫌いという、まっすぐな性格になっていききました。『謹』という漢字には「氣を引きしめてつつしんだ態度をとる」という意味があります。謹は「名は体を表す」という言葉の通り育ち、その性格が身だしなみや言葉づかいに表れていました。

謹は、十八歳の夏休みに北海道を訪れました。北村で兄が開拓した農場を見て、その風景に圧倒されました。美しい花々、そよぐ風、畑に広がる農作物。何とすばらしい土地なのでしょう。今、兄の雄治は、この北村を開拓し、北海道の人々の生活を豊かにするために、志をもって有意義な仕事をしているのです。謹は、自分も北海道開拓にこうけんできることを学びたいと考え、札幌農学校（今の北海道大学）を目指すことにしました。雄治にはげまされながら受験勉強を続け、みごと合格。雄治も甞も、謹の合格をととても喜んでくれました。

北海道での学生生活に大きな希望をいただき、謹は入学の準備を始めました。アメリカからやって来たクラーク博士が教える札幌農学校で学ぶことを、心待ちにしています。

「早く北海道に行きたい。」

謹は北村で見た風景を思い出しながら胸が高鳴りました。

しかし、そんな謹に悲しい出来事が起きました。合格通知が届いた翌月、病気がちだった雄治が亡くなったのです。謹は信じられない気持ちでいっぱいでした。自分たちをいつも見守り助けてくれた雄治に何とか恩返しをしたいと思っていたのに。父のようにたより、目標としていた兄を失い、自分はどうかやって過ごしていけばいいのだろうか、途方に暮れました。

牧場主へ

雄治のことを考えるとつらくなる日々を送っていましたが、いつまでも泣いていることを雄治はよしとはしないはずです。甞もすでに前を向いて歩き始めています。謹は、兄たちにはげまされる思いで、その年の九月、札幌農学校の新入生として寄宿舎に入りました。農学校での学生生活がいよいよ始まったかに思いました。

しかし、ここでまた苦難が謹をおそいました。入学後すぐの身体検査で、謹は結核におかされていることがわかり、すぐに入院することになりました。そのまま、謹が大学にもどることはありませんでした。謹の病気はなかなか良くなかなかつたのです。

病気を治すためには、空気のきれいなところが一番良いということで、謹は、北村の農場で少しずつ仕事をしながら安静にしていました。身体をいたわるために、一日牧場で仕事をして、二三日は農場の事務所にいるという生活をしていました。謹は、もっと仕事がしたいと、はがゆく感じていました。

「兄のためにも、早く北海道の人々の役に立ちたい。」

一日も早く回復して何かをやらなくてはいけない、と気持ちはあせります。しかし、「きちんと休みをとって身体を第一にすることが先だ」という甞からの教えもあり、できるだけ無理をしないで療養を続けました。謹にとって、とてもつらい時期でした。

そんなわけですから、なんとか病気から回復した謹が、牛の飼育をする牧場の仕事を甞から任された時には、とてもうれしく、誇らしく思いました。その後、謹は、土地を甞からわけてもらい独立し、自分の牧場を持つことになりました。その土地は、沼のほとりにありました。謹は、その沼に「鏡沼」と名前をつけました。自分が幼いころを過ごした故郷、山梨県の鏡中条村から「鏡」という文字をとって名づけたので

す。そして謹きんは、家の前まへにあるニレの大木たいぼくに、時刻じこくを知らせるかねをつるし、時計台のかねの音が有名な札幌農学校さっぽろのりこうがくをしのんだのです。行きたくてたまらなかつた農学校への気持ちきもちを忘れることはなかつたのでしよう。朝あさな夕ゆふな、毎日決きままった時刻じこくにそのかねの音を聞き、美しい鏡沼かがみぬまの風景ふうけいをながめながら、日々の生活せいかつに向かう姿勢しせいを正ただしたのでした。

ホルスタイン

鏡沼かがみぬまのほとりで、北村牧場きたむらぼくじょうをスタートさせた謹きんは、牛ぎゅう乳にゅうのほか、バターやチーズをつくり始めました。牛の飼い育いくが好きすだったので、とても大事だいじに牛を育てました。北村は水害みずがいの多いところところです。「何とか水害みずがいから牛を守まもらなければならぬ」と考えた謹きんは、さまざま工夫くわふをほどこしました。例えば、洪水こうずいの時ときには牛を建物の二階にがいに避ひ難なんさせるため、栈橋さんばし(スロープ)を用意よういしたり、牛舎ぎゅうしやを土台どだいの高いがんじょうな建物たてものにして、牛を安全あんぜんに保護ほごできるようにしたりしました。さらには、牛が食たべるえさを



水害みずがいから牛を守まもるため2階建てにがいにした牛舎ぎゅうしや

たくさん保存ほぞんできるように、石づくりのサイロ※を建てました。これは空知地方で最初のものでした。ほかに、牧草かり取り機や耕こううん機など、これまでに北村にはなかったような機械を導入どうにゅうし、着実に牧場を大きくしていきました。

もともと、北村での牛の飼育しよくは、雄治ゆうじが十勝地方から「エアシヤ」という種類の牛を買ってきたところから始まります。そのころは、牛の飼育はそれほど盛さかんではありませんでした。一方、「ホルスタイン」という種類の牛は、乳牛にゅうぎゆうとして高い能力のうりよくがあるということが外国でも知られていて、世界のいろいろな国で普及ふきゅうに力が入られました。北海道でもホルスタインを普及ふきゅうした方が良いという意見はあったものの、ほとんど進んでいませんでした。

その当時、北海道の農村では、交通の便が悪く、よそから食料が豊富ほうふに入ってくることはあまりありませんでした。水害などで農作物がとれなかった年には、農家の収入しゅういが少なくなり、十分に栄養えいようをとることができないということもありました。謹きんはなやみました。

「どうやったら農家の生活を改善かいぜんできるのだろう。」

考えた末に出した答えが、牛の飼育しよくでした。牛乳や乳製品にゅうせいひんは、農家にとって大切な栄養源えいようげんであり、さらに牛を飼育しよくすることによって農作物以外の収入しゅういを得るえことができないため、解決策かいけつさくの一つだと考えたのです。

※サイロ
かり取ったばかりの牧草や作物をつめ、発酵はっこうをさせてえさをつくって貯蔵たくわするための、石レンガ・コンクリートなどでできた建物。

謹は、良質な牛乳を出すことができる「ホルスタイン」を政府にお願いして、何とか手に入れました。さらには、アメリカからホルスタインを輸入して、優良な牛にするために改良を続けていきました。

そのうちに、北村牧場の近所に住む人たちの間で、「牛乳を飲むと次の日にとても元気になる」と牛乳の効能についてのうわさが聞かれるようになりました。「子どもたちに牛乳（栄養）を」と北村牧場から牛を購入し、飼育する農家も出てきて、村内に牛の数が少しずつ増えていきました。こうして、謹が始めたホルスタインの飼育と改良がどんどん広がっていったのです。

謹の熱心な取り組みによって、北村牧場の他にもホルスタインの飼育農家が増えていきました。そして、謹が育てる牛の評判はまたたく間に全国に広がり、北村から本州にもホルスタインが送り出されるようになりました。北村の牛は、質が良いと全国でも有名になりました。こうして、謹は、「空知ホルスタインの父」と言われるようになったのです。

デンマークという国があります。北欧の小さな国ですが、先進的な農業で成功していることで有名どころです。デンマーク式の農業では、牛のふんを肥料として使い、畑を豊かな土地にし、味の良い農作物を多く実らせるという、農作物と牧畜をじゅん

かんさせる方法をとっていました。また、農家たちが集まって協同組合をつくり、産業として発展させていきました。

一九二三（大正十二）年、関東地方に大きな地震があつて物が不足した時のこと。バターをはじめとする乳製品が海外から多く入つて来るようになり、日本国内での値段が一気に下がるといふことが起きました。乳製品をつくる一軒一軒の農家は収入が減り、生活がとても苦しくなりました。「何とかして収入を安定させられないだろうか？」と農家は考えました。何度も話し合いをするにつれて、北海道でも、気候や土地の大きさが似ているデンマーク式の農業を取り入れたらどうかという動きが出てきました。農家が協力して組合をつくり、政府や会社と対等に話し合つて問題を解決していこうと、立ち上がったのです。

その中心メンバーとなつたのは、もちろん謹でした。最初の協同組合の設立委員に選ばれたのです。謹は仲間とともに調査をし、同時に技術員の養成に努めました。そして、北海道で牛乳の加工品を製造する団体をまとめる「北海道製酪販売組合連合会」の役員になります。これは、のちの「雪印」として北海道の一大ブランドとなりました。そして他にも、今の酪農学園大学の理事として、酪農をつぐことを希望する若い世代の人を育てることにこうけんしました。

※北海道製酪販売組合連合会

一九二五（大正十四）年、酪農家が中心となり「農民による、農民のための生産組織」として設立。乳製品の加工、販売につとめた。現在は、『雪印メグミルク』。

石川啄木の歌碑

北村に石川啄木の歌碑があります。石川啄木は、明治時代の日本文学を代表する歌人・詩人です。歌碑があるということは、啄木は北村に来たことがあるのでしょうか？ この歌碑の話は、北村謹の妻、智恵が、まだ結婚前の橘智恵だったところにさかのぼります。

石川啄木と橘智恵は、函館の小学校で一緒に教師をしていました。啄木が二十二歳、智恵は十九歳。同じ学校で過ごしたのは、わずか三ヶ月間だけでしたが、啄木は智恵の人柄や美しさにひかれました。啄木は智恵のことを、こう日記に書いています。

「橘智恵君は、まっすぐに立てる 鹿ノ子百合なるべし。」
それぞれ函館から出たあとに会うことはありませんでしたが、啄木は智恵へのあこがれの気持ちが忘れられなかったということなのです。



石川啄木の歌碑

※鹿ノ子百合
百合一種。花びらに鹿の子の体の模様のような斑点があることからその名がついた。

智恵はその後、北村謹と結婚。北村智恵となり、六人の子どもを育てながら家族や仕事を大切に作る幸せな生活を送っていました。一方啄木は、『一握の砂』という、のちにとても有名になる歌集を出します。歌人としての最初の歌集で、その中におさめられている「忘れがたき人人(二)」には、智恵のことがたくさん書かれています。啄木は、その歌集を智恵に送りました。その時、啄木は、東京でとても貧しい生活をしていて、病気もしていました。それを知った智恵は、歌集のお礼として、北村牧場でつくっているバターを啄木に送りました。啄木は、智恵のやさしさに感謝の気持ちを含めて、歌をよみました。

石狩の空知郡の牧場のお嫁さんより送り来しバタかな

この歌は、啄木の歌集『悲しき玩具』の中におさめられています。啄木が北村に実際来たことはないのですが、智恵と啄木のこの美しいエピソードを永く伝え残すために、歌碑が建てられたということです。鏡沼のほとりにあるので、ぜひ行ってみてください。

※一握の砂
石川啄木の最初の歌集。生活感あふれる新たな歌風は、若い世代にもえいきょうをあたえた。第二歌集は『悲しき玩具』。

北村牧場の平和な日々

北村牧場は、謹きんの努力のかがあって、どんどん大きくなっていききました。たくさんの牛がいて、農作物が豊ほう富ふにとれました。謹きんは花が大好きで、牧場にはいつもグラジオラス、チューリップ、百合ゆり、ダリアなど、色とりどりの花が咲き乱れ、北村の人々ひとびとの目を楽しませています。春になると山菜とり、夏には鏡沼かがみぬまで水遊びや魚つりもできました。秋になると木々きぎが赤や黄色に染そまり、夕日がそれらを照らします。そして一面雪で真っ白な冬。晴天の日はキラキラと光る雪に、子どもたちは、はしゃぎ声をあげてそり遊び。日が暮くれるまで遊び、寒さでかじかんだ手足をまきストーブであたたためながら、その日のことを語り合うのも、また楽しみでした。

謹きんは洋食を好んでいたのので、朝食は牧場のミルクをたっぷりそそいだ紅茶こうちゃとパン、チーズを食べ、家の牛乳ぎゅうにゅうでつくったバターをたっぷり使ったクッキーをおやつにしました。アメリカ製せいのまきオーブンで焼かれたクッキーは、北村家では「うちやき」と

〈北村牧場のうちやき〉

材 料

バター	150g
砂糖	150g
たまご	1個
小麦粉	350g
ベーキングパウダー	小さじ2はい
牛乳	少々

つくり方

- ・バターをやわらかくし、よくまぜる
- ・砂糖さとう、卵たまごを入れ、よくまぜる
- ・小麦粉こむぎこベーキングパウダーをふるって入れ、なめらかにまとめる
- ・生地こねを平らにのばし、型抜きし、はけで牛乳ぎゅうにゅうをぬる
- ・天板てんぱんにならべ、オーブンに入れる
- ・180度で15分焼く

(北村の思い出／北村の思い出刊行会より 脇田千春わきたちほるさんのレシピ)

呼ばれ、お正月が近くなるとたくさん焼いて、親戚に送ったものでした。

謹は、地域の人たちから「北村牧場のお旦那さん」と呼ばれていました。「お旦那」というのは山梨の方言で、「夫、主人」という意味ですが、謹の立ち居ふるまいからもびつたりの呼び名でした。おしゃれが好きで謹は外国の生地を使った洋服を着こなし、あぐらをかいたことがないほど行儀が良く、食事の時はきちんと正座をしていただいていました。

自分の子どもたちにも、食事は残してはいけないことや、魚の骨の取り方まで厳しく指導しました。そして、正義感がとても強く、誰彼へだてなく悪いことをするときちんとしました。

ある時、五番目の子のくが、謹が大事にしていたパーカーというブランドの万年筆をこわしました。くには最初、自分ではないと言いつ張ったのですが、うそがとうとうばれてしまいます。おこった謹は、くを雪の中に投げ出しました。万年筆をこわしたことではなく、どんなに小さくてもうそれは泥棒の始まりだと言いつ、絶対に許さなかつたのです。

そういつた厳しきは、礼儀作法を身につけさせて、人としてはずかしい思いをさせたくないといつ愛情によるものでした。

北村地域の発展

北村はいく度となく、水害や冷害におそわれ、そのたびに開拓の意志がくじけて村を去って行く人が相次ぎました。しかし残った者たちは、ますます一致団結して黽や謹を中心として意欲的に困難に立ち向かいました。謹は、北村の人たちのそのような姿を見ながら、地域の発展には、特に若い青年たちの団結が大切だと実感し、青年会を結成させました。地域内の十五歳から三十歳までの男子とその家族が交流できる組織を整えたのです。そこでは、北村をどうやったらもつと良くできるのかが活発に話し合われ、みんなの意見をもとに地域こうけんの活動が行われました。

村の青年たちの教育にとっても熱心だった謹は、教育にめぐまれていなかった青年のために、彼らが学ぶ夜学の場所もつくりました。そのおかげで、昼間は仕事をしながら夜に学ぶことができるようになりました。また、勉強だけではなく、体育教育にも力を入れ、特に剣道の指導には重点を置きました。中学生のころから剣道を学び、札幌武道会という名門の剣道場に通って訓練を積んでいた謹が、自らその指導を行っていました。剣道は「礼に始まって礼に終わる」と言います。礼儀については特に厳しく教えました。青年たちは「メン！ドウ！」と勇ましいかけ声をあげ、その熱気は、冬の寒さをもふき飛ばしました。謹の指導により、北村からは優秀な剣士が生まれて

いきました。

青年たちから謹は「かみなりおやじ」とおそれられていたものの、その言葉には親しみがこめられていました。謹は誰にでも気さくに話しかけ、体調を気づかいました。仕事でどこかに行く時は必ずおみやげを買って帰り、青年たちや牧場で働く人たちを喜ばせるという優しい心づかいがありました。村の人たちは、みな、謹を父親のようにたより、尊敬していたのです。

加藤愛夫という、北村で謹と同じ時代に生きた詩人がいました。

謹と親交のあった加藤は、謹の人となり『雪どけ』という詩にこう書いています。

雪どけ

『海図』／『詩人のいる風景』一九三一（昭和六）年再掲

朝早くK氏がやって来た

ホームスパンとなめし革の労働服で

夫人の手になる自慢のビスケットを持って来た

氏は、村のブルジョワであり、大牧場主

※ブルジョワ語源はゲルマン語で住民の意味。近代社会においては、物を生産する手段をもつ人など。一般的にはお金もちをいう。

この頃は世界的名牛を出して、有卦※に入っている

しかし副業を持たねばやってゆけません

上バター一ポンド五十銭では

牛乳一升一六銭五厘では

氏は人格の高い人であった

思ったことは必ずやり通す意志の強い人であった

そして謙遜けんそんで

さればこそ若い私にもこうして話を持ちかけるのだった

心底から農民生活を語るのだった

つらいものです、何という生まれ合わせでしょうか

村の娘は百姓が厭いやだと言います

氏は輝かがやく顔を上げて笑った

雪やけの大きな顔に陽が照てった

氏は都市人の消費しょうひについて

私は販売及中間商人の暴利ぼうりについて

残るものは汗と苦くばかりですな

農民のあごは乾ひ上がりかけています

※有卦
良いことが続くといわれる七年間のこと。その人が生まれた干支えとに基づいて、人生の中でいつ訪あひれるかが決まる。

氏は昼近く帰った

かた雪を踏んでステッキをつき

後姿を見送ると老いて見えた

酪農の仕事は楽なものではありません。朝の五時から夜の九時まで働き、牛のお産が近づくと夜中も見回りが必要です。自然とともに生き、時には水害や寒さなどの脅威とたたかわねばならない時もあります。くじけそうになることも多々ありました。しかし謹は、弱音をはくことはありませんでした。どんな時も、「北村のお旦那さん」として、雄治や黽とともに開拓してきた北村を、きぜんとした態度で引っ張っていったのです。つらくなつた時に謹を上げま



したのは、北村の人々と、故郷である山梨の存在でした。鏡沼から遠くをながめると、子ども時代に走り回った大自然を思い出します。そして、目にうかんで来るのは、世のため人のために努力をおしまない兄たちの姿。

「落ちこんでいるひまなどないのだ。自分を必要としている人たちがいるのだから。」
鏡沼にかねの音がひびきわたる時、謹はまた顔を上げ、前を向くのでした。

謹をたたえて

一九三五（昭和十）年、五十二歳で謹は亡くなりました。肝臓ガンでした。働き盛りの死で、まだまだやりたいことがたくさんあったことでしょう。悲しみにくれたのは家族や村の人たちだけではありませんでした。北海道、ひいては日本全体の酪農の先頭に立って頑張ってきた謹の死を、同業者も政府の役人もとても残念に思いました。

「北海道製酪販売組合連合会」が創立十周年を記念して出された冊子に、謹の人柄について書かれていますので、その内容をわかりやすくご紹介します。

「謹氏は、つつしみ深く真面目で正直な性格で、いつも上品でおだやかでした。そして、どんなことにも真心をつくし、常に高い理想をもって、正義をたもつらぬこうとする強い意志をもった人でした。流行にまどわされることなく、しっかりと酪農を経営することで、みな模範となり、多くの優れた牛を生産して、日本の乳牛の改良にこうけんしました。常に北海道の農村のために、自分自身のことをかえりみることなく努力を重ね、その誠意に対して、多くの人々が感謝しているのです。」

誰もが謹のさまざまな功績をたたえ、敬意をはらいました。その後、北村牧場は、息子の茂雄と次男昌次があとをつぎ、ますます発展をどけていきました。二〇一七（平成二十九）年、北村遊水地事業のため、百十一年にわたる牧場の歴史に幕を閉じるまで、北村の中心として、かがやき続けたのです。

おわりに

百三十年も昔、北村雄治ゆうじから始まった北海道開拓かいたくの夢ゆめは、黽びん、謹きんへと引きつがれ、立派りっぱに成しとげられました。理想を高くもち、多くの困難こんなんにあってもくじけず、情熱じょうねつをもって意志いしをつらぬき通す北村三兄弟の姿すがたが伝わったでしょう。自分の利益りえきをかえりみず、世の中のために何かしたいという気持ちと行動力が、北村という地だけでなく北海道を変えました。記念碑きねんひや当時の資料しりょうも北村に残っているので、ぜひ彼らかれの足あとをたどってみてください。北村三兄弟の生き方がみなさんの心に残り、明日への希望になれば幸いです。

参考文献

「北村々々史」 「北村史 上・下」 「北村百年史」 「甲斐から石狩へ」 「北村の記憶」 「北村の日々」

北村三兄弟物語

「夢と理想を追い求め北村の
大地を切り開いた三兄弟の物語」

発行日 令和四年三月

発行者 北村地域農泊推進協議会

協力 岩見沢市立北村小学校

北海道教育大学岩見沢校

栗林千奈美

ライティング 栗林千奈美

表紙題字 NPO法人山のない北村の輝き 七戸美枝子

表紙イラスト 北海道教育大学岩見沢校美術文化専攻

イラストレーション 研究室三年 小島 有世

監修 脇田 千春

印刷 株式会社 組合印刷